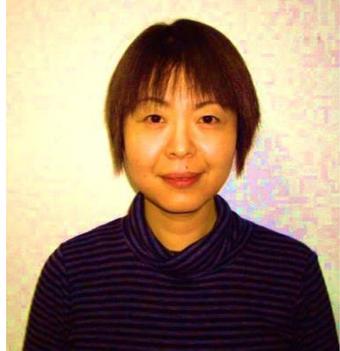


# 学習指導改善調査 協力者 実践計画書

## プロフィール

氏名	小林 英子	
勤務先	阿賀野市立保田小学校	
研究実践の 学年と教科	4 学年 図画工作	

## 今後の実践の方向

取組の視点や方向性	<p>4年生は、図画工作の版画で、彫刻刀を使って木版画に初めて挑戦する。ここで、彫刻刀の使い方や基本となる技法を確実に指導するだけでなく、「対話」を重視していきたい。</p> <p>対話とは、「指導者と子どもとの対話」、「作品と作者（子ども）との対話」、「子ども同士の対話」のことである。版画指導を通して、人・ものと対話しながら作品を作り上げていく過程も大切にしたいと考える。</p> <p>このような実践は、過去に何度か行ってきた。しかし、今までは小規模校の少人数の中での実践が多く、「対話」することがさほど困難ではなかった。今年度受け持つ児童は30名と、今までの中で最も人数が多い。これまでの実践で得た財産を、指導する児童数にかかわらず生かすことができるかについて今年度の実践を通して検証していきたい。そして、「対話」を大切にしながら行う版画指導の有効性を示したい。</p>
大まかな実践の予定	<p>1 学期・・・「日常が題材であり、子どもとの対話によって題材を1つに絞る」</p> <p>①「いちばん〇〇したこと」（びっくりした・楽しかった・がんばった…）をたくさん思い出させて描かせる（下絵の下絵）。</p> <p>②下絵を1つに絞る。（「指導者との対話」）</p> <p>③下絵の清書をする。</p> <p>2 学期・・・「子どもたちと共有したものを作品として実らせる」</p> <p>①版木の裏面を使用し、彫刻刀の種類別彫り方指導を行う。</p> <p>②版木の表面に下絵を写す。（カーボン紙）</p> <p>③彫る。（顔や腕の丸み、背景や空気の流れを丁寧に彫る。）</p> <p>④印刷する。</p> <p>⑤子ども同士が、作品鑑賞し合い良さを伝え合う。</p>

# 実践報告書（図画工作）

阿賀野市立保田小学校 小林英子

「実践計画書」にしたがって、1学期から版画に取り組んだ。取組を行う上で重視したのは「対話」である。ここでいう「対話」とは以下の通りである。

- 1 指導者と子どもとの対話。
- 2 作品と作者（子ども）との対話。
- 3 子ども同士の対話。

この3点を大切にしながら実践を行ってきた。

## 1 「指導者と子どもとの対話」の場面

「一番〇〇したこと」（びっくりした・楽しかった・がんばった…）をたくさん思い出させて描かせ（下絵の下絵を描かせ）、下絵を一つにしぼる。



### 活動の実際

A4の紙をたくさん用意し、1枚につき1つの思い出を描かせる。下絵の下絵である。1枚の紙には時間をかけないことで、たくさん思い出を出させることができた。その中から版画にする題材を1つにしぼっていった。その際、子どもの思いが強く、はっきりしている題材を選ぶために対話を行った。選んだ題材の絵がそのまま版画にしづらい構図もある。このときは、下絵の下絵ともに書いたその時の気持ち（吹き出し）を手がかりに、版画の構図を再構成していった。

## 2 「作品と作者（子ども）との対話」の場面

下絵を清書し、版木に写し、彫る。



### 生じた困難点と新たな手立て

下絵の清書をしている段階で、人物が描けないという子どもがたくさんいることが分かった。そこで、ポーズをとった写真を撮り、拡大し、写させることを試みた。写真を活用して描くことで、人物の表情・動きをイメージできた子どももいた。しかし、まだ多くの子どもが、人物の表情や手足の動き、体の向きなどをイメージすることが難しい様子であった。そこで、人物を「描く」のではなく、「作る」という方向転換を行った。つまり、人物は紙版にし、背景を彫刻刀で彫るという木版の「併用版」を行うことにした。



### 活動の実際

人物が描けないのは、手・足の動きをイメージ化できていないからと予想された。そこで、人物の手足を紙で作成し、実際に動かしてみた。走る、泳ぐ、しゃがむ…などといった動作を関節の部分で手を曲げさせたり、足の向きを確認したりさせることで子どもたちは、自分の表したいものを作ることができた。また、人物の目（輪郭・黒目）、眉、口などでその時の気持ちを表現することができていることを確認した。このように作品と実際に「対話」させることで、笑っている、大声を出している、悩んでいる、いたづらをしている、びっくりしている…などを子どもたちが思い思いに表現することができた。

### 3 「子ども同士の対話」の場面

①制作場面、②印刷場面、③作品展示場面と3回の「対話」場면을意図的に設けた。



#### 活動の実際

- ①子ども同士が、互いの良さを認め合えるように版木を次の製作まで棚に立てかけて、鑑賞できるようにした。
- ②印刷の段階で、グループを組んで印刷し合うことで、友達の作品の完成を見届ける機会を作った。
- ③作品完成後は、文化祭で展示を行い、鑑賞時間で、完成した作品を互いに見て「温かいメッセージ」を伝え合う時間をもつことができた。

#### <今後の課題>

少人数での指導と違い、一人一人違った題材で行う版画指導は大変なものであったというのが正直な感想である。しかし、版画が終わった後、子どもたちのつぶやきからは「また版画したいな。」「彫るのがとても楽しかったね。」という肯定的なものが多かった。

私が関わっている子どもたちの中には、1つのことに長くかかわることが困難で、飽きやすいといった子どももいる。しかし今回は、1学期から10月の文化祭に展示するまで長い学習活動にも関わらず、ほとんどの子どもが飽きずに最後まで熱心に取り組むことができた。このことから、子どもたちは、「見通しのもてる」、「活動の種類がいくつもある（描く→彫る→刷る）」「成果が形（作品）になる」「形になったものを評価（文化祭やコンクールに出す）してもらえる」ものには積極的に取り組めることが改めて確認された。と同時に、今回の実践のように活「対話」を大切にしながら活動を進めていくことが、子どもたちの意欲を維持し、その結果、力を付けていけることにつながると考える。



<実際の展示の様子>